がんにプラス効果望める薬

がん社会を診る

中川 恵一

2023年の国内の医療用医薬品市場は前年比約3％増の11兆2806億円。薬効別では抗腫瘍剤が約2兆円とトップでした。

抗腫瘍剤以外のがん治療を目的としない薬にも、がんに対するプラス効果が期待できるものがあります。連載で紹介した糖尿病治療薬のメトホルミンもその一つですが、今回は解熱鎮痛剤のアスピリンと脂質異常症に使われる「スタチン」を取り上げます。

アスピリン（アセチルサリチル酸）は解熱鎮痛剤として有名で、値段も安い素晴らしい薬です。鎮痛効果が出ないような低用量でも、血液をサラサラにして心筋梗塞や脳梗塞を防ぎます。

この低用量投与はがん予防にもつながることが明らかになってきました。世界でもトップランクの医学雑誌「ランセット」に11年に報告された研究は、8つの無作為比較試験を統合して解析しています。その結果、少量のアスピリンを毎日服用すると、がん死亡リスクが20％も低下していることが分かりました。5年以上服用している人は、胃がんや大腸がんを含む消化器がんによる死亡リスクが50％以上も低下していました。

13万人以上の米国人を32年間も追跡した大規模な調査でも、アスピリンの定期的な服用は消化管がんのリスクを15％、大腸がんに限れば19％も低下させると示されました。乳がんや前立腺がんなどではリスクの低下は見られませんでした。

もう一つ、がんにもプラスになる可能性を持つ薬がスタチンです。悪玉コレステロールの合成を抑え、動脈硬化に非常に有効な薬です。日本での研究がこの薬の開発につながりました。国内で約700万人が服用しており、過去30年間で最も多くの患者に使われてきた薬といわれます。

スタチンの副次的作用として、がん患者の生存率を高めるという研究結果が多数出ています。がん患者で脂質異常症に対してスタチンを服用している人は、そうでない人に比べて長生きしているということです。

17年に報告された111万人ものデータを分析した研究でも、スタチンを飲んでいるがん患者は、飲んでいない患者と比べて全死亡リスクが30％、がんによる死亡リスクは40％も低下していました。死亡率に加え、再発・進行するリスクも低下していました。がんの診断後からスタチンを飲んでいた患者で、より生存率が高かったことも分かりました。

日本人男性の5人に2人、女性の2人に1人が脂質異常症かその予備軍といわれます。がんと診断された際には、脂質異常の有無もチェックしておくとよいかもしれません。

（東京大学特任教授）

イラスト　中村　久美